

旧制中学校の内部過程における学業成績の実態に関する研究

——山形県鶴岡中学校を事例として——

日本学術振興会特別研究員（比較教育社会学コース） 河野 誠 哉

Academic Performance in a Former Middle School Before the War :
A Case Study of the Tsuruoka Middle School

Seiya KAWANO

The aim of this paper is to clarify the difference in academic performance in secondary school before the war, dealing with the data of the Tsuruoka middle school in Yamagata prefecture. So far the studies of school education of that period have paid so little attention to academic performance that an attempt to elucidate its reality here can be of much significance.

According to the documents retained in the school, we put every student's record into a database and made an analysis concerning academic achievement of each student. This analysis concerns those who were enrolled from 1911 to 1930.

The analysis of some of their attributes led to the following results.

First, the comparison of performance due to school career before the entrance showed a remarkable difference along with their career, in the case of the students who enrolled in the period of since 1911 to 1919, when various types of students from lower primary school (jinsho) to upper primary school (kosho) came together. However, it is not the case with those who entered in 1920 to 30, when majority of the students had graduated from "jinsho".

Next, to investigate the difference due to family background, we compared and examined the performance in respect to former feudal position(zokuseki)and parents' occupation type, in either of which case no remarkable difference is observed.

These results seem to imply that middle school then was free from the class-oriented tendency. At least it might be true that middle school admitting students through a certain entrance examination offered equal opportunity for each student to make the best of their ability regardless of their origin.

目 次

I. はじめに

II. 事例と方法

A. 対象と時期について

B. データと変数について

III. 小学校との接続と入学後の学業成績

A. 小学校からの接続の実態

B. 入学前学歴別の学業成績

IV. 家庭的背景と学業成績

A. 社会集団と中等教育

B. 族籍別の学業成績

C. 親職別の学業成績

V. 考察

I. はじめに

本稿は、山形県立旧制鶴岡中学校を事例として、戦前期の中学校内における学業成績の差異の構造を明らかにすることを目的とするものである。

個々の問題については後に譲るとして、ここで学業成績という変数を検討の俎上に載せることそれ自体の意義の確認から、まずは始めることにしたい。強調しておきたいのは、従来の研究においてそれは「抜け落ちた変数」であり続けたという事実である。

すなわち、戦前期の中学校に関しては、入学から卒業にいたるまでのあいだ、厳しい競争的な選抜が行われていたことが知られているが、実際にその内部過程の様相に対しては必ずしも十分な光が当てられてきたとは言いがたい。高かった中退率という事実から、いわば遡及的に内部選抜の厳しさが指摘されてきたのであって、及第と落第、そして中退の実態分析からもう一歩進んで、さらに学業成績の様相にまで踏み込まれることはなかった。

中学校教育の実態に迫った研究としては第一に挙げられるべき斉藤利彦の研究についてもそのことはあてはまる¹⁾。たとえば中途退学について分析したなかで、中退理由のひとつとして学力の問題について言及されているが、そこに「学力」そのもののあり様についての追究は留保されたままである。

それは次のように言い換えることもできるだろう。中退者の分析はいわば淘汰された者たちのあり様の分析であるが、他方で在学期間をうまく乗り切ることのできた側の生徒たち内部の多様性については、必ずしも十分に捉えられてこなかった、と。このような視点に立ったときに、学校内での「成績」という変数を組み込んだ分析が不可欠になってくることは明らかだろう。

また他方で、社会階層と教育との関係を追究するタイプの先行研究に対しても、同様の問題点を指摘することができる。戦前期の中学校は、高等教育進学のための「正系」の進学ルートとして位置づけられ、そこでの教育機会には階層的な偏りが存在していたことについても従来から指摘されているところであるが²⁾、学校内部の様相に対してまでは同じ視点からアプローチされることはまずなかったといってよい。社会階層によって異なる期待を背負った人員を高等教育に送り込む正系ルートとしての位置づけが認識されながらも、そこに重要な媒介項であるはずの中学の内部過程についてはほとんど触れられないままでいたわけである。とりわけ進学機会との関係からすると、ここに学業成績という変数が組み込まれないままでいたというのは大きな欠落であったというべきである。

先行研究におけるこうした欠落の一因としては、資料的制約によるところが大きかったことはいうまでもない。マクロな統計資料からは、学校の内部過程に接近することは困難であり、そのためインプット—アウトプッ

ト過程の分析にとどまらざるをえないというのは自然な成り行きであった。それに対して本研究の基礎となったのは、事例とした一中学校の内部資料を活用した、個人単位にまで遡及可能なデータ開発の作業である³⁾。こうした条件整備によって利用可能となった新変数に対して、ひとまずはそれ自体の構造的な分析を図っておきたいというのが、本稿のねらいとするところである。

以下に、いくつかの属性とのクロス分析を通して、学校内部での学業成績の様相をスケッチしていくことにしたい。

II. 事例と方法

A. 対象と時期について

本稿で事例としてとりあげる山形県立鶴岡中学校は、1888(明治21)年、私立荘内中学校として創立された。その後1901(明治34)年には県立となり、それ以降1920(大正9)年に酒田中学校が新設されるまでのあいだ、山形県庄内地方唯一の中学校であった。同年に鶴岡中学校と改名してからは、地理的な位置づけにおいて、それまでの「庄内地域の学校」から「鶴岡市とその周辺地域の学校」へと通学圏を縮小させたとはいえ、一貫して地域に根差した中等教育機関であった点は変わらない⁴⁾。

本稿で扱われるデータは、この学校に所蔵されていた「学歴表」をはじめとする簿冊類に残された諸記録をもとにしたものである。そこから、卒業生の属性、進路、在学中の記録等についてのデータベースを作成し、分析を行なった⁵⁾。このうち、入学から卒業までの成績データが得られるのは1911年入学者からであり、また1931年入学者以降については、第1種・第2種の課程別学科編制の導入により、利用できる成績データの質が変化してしまう。そのため本稿では、1911年から30年までにこの中学校に入学した、20年分のコーホートを分析対象期間として設定している。

この時期は、学校教育体系がその接続関係や教育水準等において不安定であった当初の模索状態をすでに脱し、中等教育が全国的にも普及拡充していく期間に相当する。鶴岡中学校のある庄内地方でも、すでに触れたように酒田中学校が新設されたほか、学校そのものの定員も拡大されるなど、地域における中等教育機会の拡大がこの時期に進行している。

同時にそれは、中等教育が高等教育に対して従属の度合いを深め、中学校教育の進学準備教育化の傾向を昂進させつつある時期でもあった⁶⁾。鶴岡中学校でも大正末以降、進学受験対策が加熱したという事実が学校史のな

表1 全国公私立中学校、ならびに鶴岡中学校における入学者の学歴構成 (1911-30年) (%)

入学年	全国公私立中学校				鶴岡中学校				入学倍率(倍)
	尋小卒	高小1修	高小卒	その他	尋小卒	高小1修	高小卒	その他	
1911	38.0	32.6	28.4	1.0	15.8	36.8	42.1	5.3	1.2
1912	39.4	30.6	28.8	1.2	14.6	46.7	34.3	4.4	2.1
1913	40.9	30.7	27.2	1.3	16.0	39.3	40.0	4.7	2.1
1914	43.3	30.6	25.2	1.0	16.3	30.9	46.3	6.5	2.7
1915	45.1	30.3	23.5	1.2	18.0	38.3	34.4	9.4	2.4
1916	46.1	30.0	22.8	1.1	20.3	27.3	48.4	3.9	2.4
1917	47.8	29.3	21.8	1.1	20.9	28.4	41.0	9.7	2.4
1918	48.2	29.9	20.8	1.1	20.2	30.2	45.0	4.7	2.0
1919	58.2	24.5	15.7	1.6	49.7	26.8	19.7	3.8	2.0
1920	60.8	24.2	12.3	2.7	61.6	25.6	5.6	7.2	2.2
1921	57.9	26.0	13.5	2.6	60.1	35.5	2.9	1.4	1.7
1922	58.4	25.8	13.3	2.5	-	-	-	-	-
1923	60.8	23.7	12.6	2.9	74.6	23.8	0.8	0.8	1.5
1924	66.3	21.0	10.8	1.9	85.1	14.2	0.7	0.0	1.5
1925	67.5	21.1	9.4	2.1	82.9	15.8	1.4	0.0	1.2
1926	70.6	19.3	8.3	1.9	89.7	5.5	4.8	0.0	1.4
1927	72.4	18.9	7.4	1.3	89.6	5.6	4.9	0.0	1.4
1928	75.7	16.9	6.0	1.4	81.5	16.3	2.2	0.0	1.6
1929	80.2	12.6	5.5	1.7	80.9	18.4	0.0	0.7	1.2
1930	82.7	10.7	4.8	1.8	81.0	16.3	2.0	0.7	1.2

出典：『文部省年報』、ならびに『全国中学校ニ関スル諸調査』各年度より作成。

かで言及されているが⁷⁾、それは一面において、中学で伝達される教育内容が一定の正統性をもつものとして当然視されている状態を示すものといえることができる。かつて明治期の地方の中学校では、そこを卒業することが必ずしも次へのステップとしての意味を持ち得ず、野心のある者は中学校の正規の在学期間を全うすることなく、退学して上京、遊学するという時期があったことが知られているが⁸⁾、ここでとりあげようとしている頃の中学校の様相は、すでにそうした状態からはずいぶんとかけ離れている。学校内部で成功を取めることが、そのまま上級学校に進む道筋へと連続するものであることが誰の目にも明らかであるような状態が実現していたわけである。それだけに、ここで扱うことになる学業成績データは、そうした内実を伴う学校内での成功を示す指標として、相応の資格を有するものといえるはずである。

B. データと変数について

中学校内部での成績評価の方法は厳格であった。その点に関しては同時期の小学校と対照的である。すなわち小学校段階では、草創期当初でこそ厳格な試験制度にもとづく進級のシステムが採用されていたものの、まもなくその競争的な形態が批判され、弊害が叫ばれるようになる。そして明治後期には、文部省の指令でもって「席順」の上下が禁止され、さらには試験制度そのものが排除されていったという事実が知られているが⁹⁾、他方で中学校では、そうした動きとは全く無関係に、一貫して厳格な試験制度にもとづく進級のシステムが維持されていた¹⁰⁾。

鶴岡中学校の場合、1923年の試験規程を例にとると、学業成績は各科目とも各学期ごとの平常成績と試験成績の合計によって算出されることになっている。そして各学年の修了判定では、100点を満点として平均60点以上、かつ各科目50点以上をもって及第が認められることになっていた¹¹⁾。

そして、以上のような手続きをふまえて各学年の及落が判定されたところで、及第者に対しては、同期修了者中の成績順位を示す「席順」が割り当てられている。今回のデータの出典となった「学歴表」中には、これら第1学年から第5学年までの席順のほかに入学期の席順を記入する欄もあり、それら全てを合わせると各生徒について入学から卒業までの成績の推移が得られることになる。本稿のなかで学業成績を示す値として利用したのは、この席順データである。

ただし同期の修了者数が毎回異なるため、ここで成績を示す値としては席順の数値そのままを採用するわけにはいかない。同じ数値であっても、たとえば同期修了者数が80人である場合のそれと120人である場合のそれとでは意味する内容が大きく違ってくるからである。互いに比較が可能であるような標準化されたデータとして活用するためには、ちょっとした加工をほどこす必要がでてくる。

そこで分析にのぞむにあたって、それぞれの席順の数値を同期修了者数で除して、さらに100を乗じた値を導き、これを「席順スコア」とした。つまり「修了者100人あたりの順位」を示すような値へと標準化をほどこしたわけであり、したがって数値がゼロに近いほど上位、100が最下位ということになる。

さらにこの席順スコアを上下に5等分して、5段階の成績階層を導き、これを「席順ランク」とした。ランク1が最上位層であり、ランク5が最下位層である。

以下、学業成績の分析に際しては、この2種類の指標を活用していくことになる。

分析の対象となるのは、1911年から30年までの間に第1学年に入学し、卒業まで到達し得た者、全1949ケースであり、技術的な理由により中退者と編入者については分析対象から除外してある。

Ⅲ. 小学校との接続と入学後の学業成績

A. 小学校からの接続の実態

学業成績の差違の実態について、まずは入学前学歴別の傾向からみていくことにしたい。

ここで分析の対象とした期間は、小学校との接続関係（アーティキュレーション）のうえでも、中学校が大きな変化を遂げつつあった時期でもあった。中学校は制度上、尋常小学校6年卒業をもって入学可能であるにもかかわらず、実際には長いあいだ高等小学校以上の学歴の者を多く抱えていたのであり、そのような制度と実態のずれが急速に改善されていったのがこの頃であった。成

績の分析へと進むまえに、まずは鶴岡中学校における接続の実態を確認しておく必要があるだろう。

表1は、全国の公私立中学校と鶴岡中学校における各年度入学者の入学前学歴構成の推移を示したものである。全国的な趨勢と比べると、鶴岡中学校では1910年代を通して高小組の比率が高く、尋小卒の比率が増加していく動きはかなり鈍かったことがわかる。しかし、それまではせいぜい2割程度だった尋小卒比率は19年以降急激に上昇しはじめ、一気に全国的な水準を追い抜いて、早くも24年には8割台に到達して安定する。このように鶴岡中学校の場合、全国的な趨勢と比べてもきわめて急速に学歴構成の転換が進行したといえることができる。

このような急速な移行を可能にした条件のひとつには、この地域の中等教育機会をめぐる状況の変化が関係していたものと思われる。すでに触れたように1920（大正9）年には庄内地方で2つめの県立中学校として酒田中学校が新設され、そしてまた同じ鶴岡の地には県立鶴岡工業学校が新設されている¹²⁾。それによってもたらされる教育機会の拡大は、それまでの入学難の状況を確かに緩和させるだけの効果をもったものと思われる。表1中に示した鶴岡中学校の入学倍率の推移からは、1910年代まで2倍以上を示していた入学倍率が、20年代になると一気に低下した事実を確認することができる。こうした入学機会の面での条件整備に後押しされて、尋常小学校からの「現役」入学の困難性もまた打開され、中学校入学者構成の変化が促進されたとみることができる。

では、このように小学校との接続関係が変化しつつあった状況のもとで、中学入学後の学業面でのパフォーマンスに関しては、入学前学歴の違いによるどのような影響が生じていたのか。異なる入学前学歴をもつ生徒の間で、どのような学業成績の差異が生じ、あるいは生じていなかったのか。とりわけ教育年数の短い尋常小学校卒業生たちの動向が、ここでの問題関心である。具体的に検討していくことにしよう。

B. 入学前学歴別の学業成績

上述のように鶴岡中学校の入学者における入学前学歴の構成は、1919年あたりを画期として、その前後で大きくその様相を異にしているわけだが、それに応じて入学者の学力をめぐる状況も変化していると思われる。そのため以下の分析においては、尋小卒がマイノリティであった1919年までの入学者と、尋小卒が過半数を超える1920年以降の入学者を分けて検討していくことにする。前者のコーホート（1911-19年入学者）はちょうど庄内中学校時代の入学者に相当し、後者（1920-30年入学

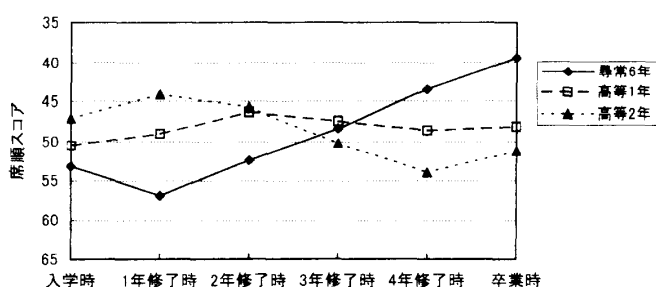
表 2 a 入学前学歴別席順ランク構成の推移 (1911-19年入学者) (%)

		入学時	1年修了時	2年修了時	3年修了時	4年修了時	卒業時
尋小6年卒業 (ケース数:142)	ランク1	16.2	16.2	17.6	17.6	23.2	29.6
	ランク2	22.5	16.2	19.0	25.4	23.2	26.8
	ランク3	17.6	19.0	22.5	21.1	26.8	19.7
	ランク4	18.3	17.6	22.5	24.6	16.2	14.8
	ランク5	25.4	31.0	18.3	11.3	10.6	9.2
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
高小1年修了 (ケース数:225)	ランク1	21.8	19.1	21.8	20.0	18.7	20.0
	ランク2	17.3	21.3	21.8	24.0	21.8	21.8
	ランク3	17.8	20.9	20.9	20.4	23.6	22.7
	ランク4	23.6	21.3	21.3	19.6	20.9	18.7
	ランク5	19.6	17.3	14.2	16.0	15.1	16.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
高小2年卒業 (ケース数:167)	ランク1	24.0	23.4	18.6	16.8	14.4	19.2
	ランク2	21.6	24.0	28.1	21.6	21.6	19.8
	ランク3	19.8	25.7	22.8	22.8	18.6	17.4
	ランク4	17.4	14.4	15.6	20.4	23.4	26.3
	ランク5	17.4	12.6	15.0	18.6	22.2	17.4
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注1: 入学時から卒業時までの全席順の判明したケースのみを抽出。

注2: ランク1が上位、ランク5が下位である。

図 1 a 入学前学歴別席順スコア平均の推移 (1911-19年入学者)



者)は鶴岡中学校と改称されて以降の入学者ということになる。

まずは1911-19年入学者についてみていこう。表2aは各入学前学歴ごとに、入学時から卒業時まで、成績のばらつき具合の推移を示したものである。表中の縦軸方向には、席順ランクの1から5まで、そのそれぞれに相当する人数の構成比(%)が示されており、さらに横軸方向には、入学から卒業までの過程でこのランク構成が推移していく様子が示されている。念のため付記しておくが、ここに示されているのはあくまで集団単位での成績構成の推移であって、必ずしも個人単位の成績の上下を追跡したものではない。個人レベルの成績の上下がど

のようなものであるかにかかわりなく、ここには当該集団としての特性によって規定された成績の推移が表現されることになるわけである。

表によると、入学時点では、尋小卒においてやや下位層への偏りが認められ、逆に年長者である高小2年卒において若干の上位層への偏りが観察される。その点では教育年数に応じた成績序列の存在を指摘できなくもないが、格別に大きな差異というわけではなく、ここで入学前学歴別の効果を殊更に強調するわけにはいかないと思われる。

むしろ興味深いのは入学1年目以降の動きである。1年修了時点での成績分布をみても、尋小卒のなかの成績下位層の比率は目にみえて増加し、対するに高小2年卒における上位層への偏りは決定的なものとなっていることがわかるのである。このことは、この時点ではまだ少数派であった「尋小組」が、中学校での学習生活のなかで、多数派で年長である「高小組」に伍していくことはそれなりに困難であったという事実を示すものと思われる。

ところが、さらに興味深いことに、入学後1年をへた時点でのこの尋小組の劣勢は2年目以降急速に挽回されることになる。表からわかるとおり、その後このグループは年を追うごとに成績下位層の比率を減少させ、上位

表 2 b 入学前学歴別席順ランク構成の推移 (1920-30年入学者)

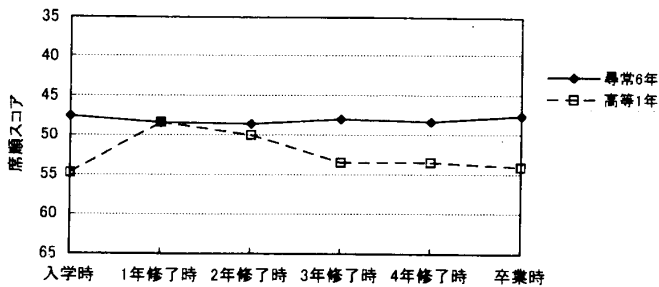
(%)

		入学時	1年修了時	2年修了時	3年修了時	4年修了時	卒業時
尋小6年卒業 (ケース数:765)	ランク1	22.7	20.7	20.8	21.0	20.4	21.4
	ランク2	20.7	20.4	20.4	22.4	21.6	21.4
	ランク3	20.7	21.0	21.3	20.1	21.6	21.3
	ランク4	18.3	21.0	20.3	19.3	19.3	19.2
	ランク5	17.6	16.9	17.3	17.1	17.1	16.6
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
高小1年修了 (ケース数:171)	ランク1	12.9	16.4	15.2	15.2	15.2	14.6
	ランク2	22.2	24.6	27.5	18.1	17.0	20.5
	ランク3	18.7	26.3	16.4	22.8	24.0	20.5
	ランク4	26.9	18.7	25.7	24.0	24.6	24.0
	ランク5	19.3	14.0	15.2	19.9	19.3	20.5
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注1: 入学時から卒業時までの全席順の判明したケースのみを抽出。

注2: ランク1が上位、ランク5が下位である。

図 1 b 入学前学歴別席順スコア平均の推移 (1920-30年入学者)



層の比率を増大させていくのである。

同じデータによってこの間の席順スコアの平均値の推移を示した図 1 a からは、このあたりの経過がより明瞭である。このように平均値で比べてみると、尋小卒の劣勢は第 1 学年修了時点で際立っており、その後ぐんぐんと順位を上げて第 3 学年修了時点では高小組と肩を並べるまでになり、さらには第 4 学年以降むしろ高小組を押しつけて、最後には優秀な成績で卒業を迎えていることがわかる。どうやらこの期間において、教育年数の少ない尋小卒の不利は入学後数年にして取り戻せる程度のものであったということができそうである。また、この事態を逆に捉えるなら、高小を経由したことによる学習上の効果は、入学後の数年間しか持続しなかったということになる。

では、尋小卒が圧倒的な多数派となる 1920 年以降の入学者についてはどうか。この期間には、しかし、学業成績をめぐる様相はがらりと変わってしまっている。

表 2 b によって 1920-30 年入学者の席順ランク構成の

推移をみてみると、尋小卒は概してどの学年でも均等な成績のばらつきを示しており、また席順スコアの平均値の推移を示した図 1 b からも、学年ごとの変動はほとんど見られない。以前のような尋小組のスコアの急速な上昇傾向はもはや認められないのである。

このことはある程度、予想される結果であるということもできる。つまり、在学生に占める尋小卒の割合が 8 割以上ともなると、彼らの成績の分布は全体のそれに近づくことになり、また、ここで扱っている成績データは席順にもとづく相対的な尺度であるため、上位から下位までまんべんのないばらつきが観察されるというのは、データの性格からして当然のことだからである。

他方で高小 1 年修了者のほうはどういうと、ランク構成において細かな変動を含みつつ、全体的には尋小卒よりやや低水準で推移していることが見てとれる。ここから尋小卒がマジョリティとなった世代の、「現役合格組」と「浪人組」の能力差という観点をもちだすことができるかもしれないが、はたしてこれがそれだけの意味を担うことのできる差異といえるかどうかは今のところ断じ難い。概してこの頃には、前の時期ほどの顕著な傾向性が消えてしまったことのほうを、強調するにとどめておくことにしたい。

IV. 家庭的背景と学業成績

A. 社会集団と中等教育

小学校との接続関係という、いわば制度的な要因にもとづく学業成績の差異の構造を確認したところで、次に家庭的な背景の違いにもとづくそれについて検討してい

くことにしたい。ここで試みたいのは、いうならば、外部の社会構造が学校の内部過程に浸透していく、その関係性のあり方を検証していく作業である。

近代化過程の地域社会と中等教育をめぐる状況において、同じ中等教育の利用者層のなかでも、社会集団によって学歴に対して期待するものが異なっていたことについては、すでに天野郁夫らの研究によって指摘されているところである¹³⁾。それによると、旧士族から新中産階級へと転身を遂げつつあった一方の社会層において、学歴取得を通して地位達成を図ろうとする志向が強かったのに対して、商人層と農民層のなかには、中等学歴に対してはむしろ、地域社会のなかでの地位表示効果を期待する傾向があったという事実が示されている¹⁴⁾。

実際、この事例においても、進路分化の様子からそうした一面を伺うことができる。卒業後進学を選ぶか、そ

れとも就職するかを選択において、家庭的背景の違いによる明確な差異が存在することが確認できるのである。

その具体的なデータを示したのが、表3と表4である¹⁵⁾。ここでは家庭的な背景を示す操作的な変数として族籍と親職業を選んでいるが、表からわかるように、族籍別では平民層よりも士族層において、また親職別では「官公吏」「専門」「教員」といった職種において、進学者比率が高くなるという傾向を確認することができる。

ではこのような進学・非進学の振り分けの過程において、各生徒の学校内部での学業面でのパフォーマンスは一体どのような形で関わっていたのか。こんどは表5によって成績と進路との関係性をみてみると、成績のよい者ほど進学する率が高いという、ごく素朴な傾向性が存在していることを確認することができる。各人にとって進学という選択が学業の継続を意味するものである以上、それは当然予想される結果でもあるだろう。成績は進路選択と結びついた一要因として十分に有効なものであるという事実が確かに認められるのである。

さて、そうするとここで学校内での成績に対しても、家庭的な背景との相関を疑わせる状況が浮かびあがってくることになる。成績は確かに卒業後の進路選択に対して一定の傾向性を有するという、上述の結果から引き出される可能性のひとつとして、我々はここに成績という変数が、進学機会の偏りを説明する媒介項として関与しているという関係を思い浮かべることができるはずであ

表3 族籍別の卒業後進学率 (%)

	士族	平民	不明	合計
進学	68.8	61.1	66.2	63.9
非進学・不明	31.2	38.9	33.8	36.1
合計 (実数)	100.0 (314)	100.0 (745)	100.0 (237)	100.0 (1296)

注：1911-24年入学者。

表4 親職別の卒業後進学率 (%)

	官公吏	専門	教員	軍人・警察	会社員	鉱工業	商業	農業	神官・僧侶	その他	無業	不明	合計
進学	70.5	81.7	75.3	56.5	60.0	57.2	54.7	55.4	59.2	52.9	62.1	65.6	61.3
非進学・不明	29.5	18.3	24.7	43.5	40.0	42.8	45.3	44.6	40.8	47.1	37.9	34.4	38.7
合計 (実数)	100.0 (156)	100.0 (120)	100.0 (154)	100.0 (23)	100.0 (120)	100.0 (194)	100.0 (406)	100.0 (424)	100.0 (71)	100.0 (17)	100.0 (203)	100.0 (61)	100.0 (1949)

注：1911-30年入学者。

表5 卒業時席順ランク別の卒業後進学率 (%)

	ランク1	ランク2	ランク3	ランク4	ランク5	合計
進学	81.2	69.5	56.4	53.0	43.3	61.3
非進学・不明	18.8	30.5	43.6	47.0	56.7	38.7
合計 (実数)	100.0 (383)	100.0 (384)	100.0 (381)	100.0 (372)	100.0 (319)	100.0 (1839)

注1：1911-30年入学者。

注2：卒業時席順の判明したケースのみを抽出。

注3：ランク1が上位、ランク5が下位である。

る。すなわち、進学への高いアスピレーションをもった社会層ほど、在学中の学業に対してコミットする度合いも大きく、さらにはそれを梃子とすることによって進学への道を開いたであろうという構図である。そうだとすると、我々はここで進学率の高いグループのほうが成績も高いという傾向性を見出すことになるはずである。

では実際に、家庭的な背景と学校での成績とのあいだにはどのような関係が認められるのか。まずは族籍別の成績比較からみていくことにしたい。

B. 族籍別の学業成績

表 6 は士族と平民のそれぞれについて、さきほどの表 2 a・b と同じく、入学時から卒業時までの席順ランク構成の推移を示したものである。入学時点では若干、士族のなかに成績上位層の比率が高いことが確認できるが、しかしそれ以降はほぼ均等なばらつきを示しており、また族籍間の違いもほとんど認められない。このこ

とは、成績スコアの平均値の推移を示した図 2 からより明瞭であり、とくに 1 年修了時以降については、2 つの折れ線がほとんど重なるほどの近い値を示していることが見てとれる。ここにみるかぎり、族籍と学業成績のあいだにはほとんど関係がないということができそうである。

この分析結果は、これまで、近代化過程における教育機会を検討した諸研究のなかで、学校教育の利用者層としての士族の役割が強調されてきたことに鑑みると、興味深い知見を提出するものといえることができそうである¹⁶⁾。高い進学アスピレーションを有していたといわれる彼等であっても現実の学校の内部過程においては、必ずしも優秀な成績を収めていたとは限らない、ということになるからである。

とはいえ、安易な一般化を急ぐよりも、この事例の置かれた位置をきちんと測っておくことは必要であるだろう。もういちど表 3 に立ち戻って吟味してみると、卒業後の進学率における 68.8% (士族) と 61.1% (平民) という違いは、もともと必ずしも際立った格差というわけではなかったわけで、この事例の場合、このように族籍間で学校教育に対する志向性の違いはそれほど大きなものではなかったとすると、学業成績に差がみられないというここでの分析結果はそれほど意外なものではないといえるべきかもしれない。

それに関連して、ここには時期的な問題が絡んでいるという可能性もある。先行研究が対象としていたのは主に明治後期を中心とする時期であったのに対して、本研究の扱うデータはそれよりもいくぶん後の時期に属す

図 2 族籍別席順スコア平均の推移 (1911-24年入学者)

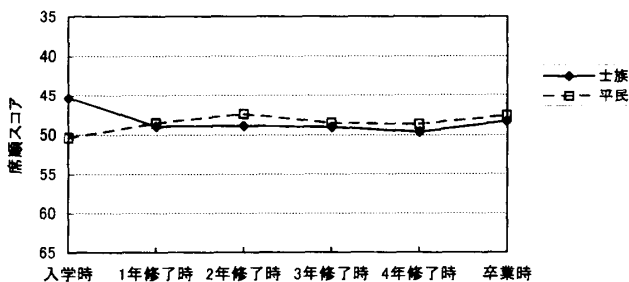


表 6 族籍別席順ランク構成の推移

(%)

		入学時	1年修了時	2年修了時	3年修了時	4年修了時	卒業時
士 族 (ケース数：258)	ランク 1	27.9	22.9	21.7	17.8	19.4	22.5
	ランク 2	19.0	15.1	17.4	22.1	19.0	20.2
	ランク 3	17.8	22.5	22.1	21.3	22.5	17.4
	ランク 4	19.0	22.1	21.7	24.8	20.9	23.3
	ランク 5	16.3	17.4	17.1	14.0	18.2	16.7
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
平 民 (ケース数：615)	ランク 1	19.0	20.0	20.5	19.5	19.3	20.7
	ランク 2	21.0	21.8	22.4	22.1	22.0	22.4
	ランク 3	20.3	21.8	21.6	22.3	21.3	21.1
	ランク 4	19.8	17.6	19.7	19.3	21.1	18.7
	ランク 5	19.8	18.9	15.8	16.7	16.3	17.1
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注 1 : 1911-24年入学者。

注 2 : 入学時から卒業時までの全席順の判明したケースのみを抽出。

注 3 : ランク 1 が上位、ランク 5 が下位である。

表7 親職別席順ランク構成の推移 (%)

		入学時	1年修了時	2年修了時	3年修了時	4年修了時	卒業時
官 公 吏 (ケース数：128)	ランク1	24.2	21.1	23.4	22.7	26.6	25.8
	ランク2	15.6	23.4	21.1	19.5	15.6	22.7
	ランク3	18.0	18.8	18.8	18.0	24.2	16.4
	ランク4	22.7	18.0	21.1	20.3	21.1	25.0
	ランク5	19.5	18.8	15.6	19.5	12.5	10.2
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
専 門 (ケース数：100)	ランク1	27.0	28.0	23.0	24.0	18.0	24.0
	ランク2	27.0	22.0	25.0	20.0	24.0	18.0
	ランク3	18.0	20.0	15.0	19.0	18.0	12.0
	ランク4	20.0	14.0	21.0	18.0	24.0	26.0
	ランク5	8.0	16.0	16.0	19.0	16.0	20.0
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
教 員 (ケース数：129)	ランク1	21.7	24.8	21.7	20.9	19.4	19.4
	ランク2	21.7	14.0	19.4	17.1	20.2	23.3
	ランク3	14.7	24.8	23.3	24.0	16.3	23.3
	ランク4	19.4	15.5	18.6	23.3	28.7	20.2
	ランク5	22.5	20.9	17.1	14.7	15.5	14.0
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
軍 人・警 察 (ケース数：20)	ランク1	25.0	20.0	20.0	30.0	25.0	25.0
	ランク2	10.0	25.0	30.0	20.0	25.0	30.0
	ランク3	20.0	15.0	5.0	10.0	20.0	15.0
	ランク4	25.0	15.0	35.0	20.0	25.0	15.0
	ランク5	20.0	25.0	10.0	20.0	5.0	15.0
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
会 社 員 (ケース数：108)	ランク1	21.3	22.2	25.0	23.1	22.2	26.9
	ランク2	17.6	21.3	17.6	21.3	15.7	14.8
	ランク3	32.4	17.6	17.6	21.3	27.8	22.2
	ランク4	15.7	18.5	22.2	17.6	13.9	19.4
	ランク5	13.0	20.4	17.6	16.7	20.4	16.7
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
鉱 工 業 (ケース数：167)	ランク1	19.8	21.0	22.8	25.1	26.3	29.3
	ランク2	21.6	22.8	21.6	21.0	16.8	16.8
	ランク3	19.8	19.8	25.7	22.8	19.2	18.6
	ランク4	20.4	22.2	15.0	21.0	20.4	18.0
	ランク5	18.6	14.4	15.0	10.2	17.4	17.4
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
商 業 (ケース数：337)	ランク1	21.1	19.6	19.6	20.8	20.8	19.0
	ランク2	21.7	22.0	22.8	22.0	17.8	24.9
	ランク3	18.7	22.8	21.7	18.7	24.3	19.9
	ランク4	21.7	22.6	22.0	22.3	19.0	17.8
	ランク5	16.9	13.1	13.9	16.3	18.1	18.4
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
農 業 (ケース数：357)	ランク1	18.5	19.0	18.5	16.2	13.4	16.0
	ランク2	20.2	21.6	23.5	22.7	24.9	21.0
	ランク3	21.0	19.9	18.5	22.4	22.4	24.9
	ランク4	19.6	19.3	20.7	17.9	19.0	19.6
	ランク5	20.7	20.2	18.8	20.7	20.2	18.5
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
神 官・僧 侶 (ケース数：63)	ランク1	23.8	11.1	11.1	9.5	11.1	12.7
	ランク2	19.0	11.1	11.1	12.7	15.9	15.9
	ランク3	22.2	30.2	23.8	25.4	19.0	19.0
	ランク4	14.3	23.8	33.3	25.4	25.4	30.2
	ランク5	20.6	23.8	20.6	27.0	28.6	22.2
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
無 業 (ケース数：165)	ランク1	24.2	20.6	17.0	15.8	18.2	20.0
	ランク2	20.0	21.8	23.6	27.9	25.5	23.0
	ランク3	21.2	22.4	25.5	24.2	23.6	19.4
	ランク4	17.0	20.6	17.0	18.2	16.4	20.0
	ランク5	17.6	14.5	17.0	13.9	16.4	17.6
	合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

注1：1911-30年入学者。

注2：入学時から卒業時までの全席順の判明したケースのみを抽出。

注3：ランク1が上位、ランク5が下位である。

る。この頃にはすでに「士族のエートス」は変容し、進学行動の規定要因としては族籍よりも職業のほうがより重要性を増していたとするならば¹⁷⁾、親職との関連のほうが我々にとってはより重要になってくるはずである。

C. 親職別の学業成績

では、親職別の学業成績の傾向はどのようなものであったか。表7によって、まずは入学時から卒業時までの席順ランク構成の推移をみていくことにしたい。

全体を通覧してみて、とくに際立った変動で目を引くのは「軍人・警察」であるが、これは明らかにケース数が少ないことの影響を受けたものである。そのため、これを除外して考えることにすると、もうひとつ目立った動きを示すグループとして注目されるのは「神官・僧侶」である。入学時点でこそ平均的なばらつきであったのが、入学後一気に上位層の比率を減少させ、在学中も一貫して下位層への偏りをもったまま推移していることがわかる。実際にこのグループは今回とりあげたなかでも進学率の低いほうに属しており、このような進学アスピレーションの低さが、在学中の学業に対するコミットの度合いの低さにそのまま結びついた事例として考えることがひとまずできそうである。

しかし、その他のグループの成績構成についてはそれほど顕著な特徴が認められるわけではない。最も高い進

学率を示していた「専門」の場合、入学した最初の時期でこそ上位層の厚さが見てとれるが、学年をあげるにつれて、ばらつきは徐々に均等化していく。そのほかに進学率の高いグループとしては「官公吏」と「教員」が挙げられるが、必ずしも顕著な偏りといえるほどのものはないままに推移しており、そして進学率の低いグループについてもやはり同じことがいえる。

これをスコア平均値で示すならば図3aおよび図3bのようになる。ざっと概観したかぎりでは、「神官・僧侶」だけが極端に低い水準を推移していて、他のグループはほぼ団子状態ということができるが、このグラフをどう読むべきかについては評価の分かれるところであろう。子細にみていくならば、「専門」においてゆるやかな低下傾向がみられ、また全体的な水準の上下幅を含むからである。しかし、各グループごとの進学傾向の違いから想像されるほどには、学校内での成績の差異は小さくなく、また一貫しないということは確かであり、さきほどの表7と合わせて考えてみても、「神官・僧侶」以外については、ほぼ同じような水準を示しているものとみてよいのではないと思われる。ここでは、どのグループであっても、席順の上位層から下位層まで、相応の比率のばらつきを含んでいたという事実のほうを重視しておきたい。

以上を踏まえると、家庭的な背景が学校内での学業面でのパフォーマンスをも規定していたであろうという当初の想定は、ごく部分的にしか正しいとはいえない。少なくともこの事例から示される事実として、中学校内部での学業成績の傾向は、卒業後の進学傾向から想像されるようには一義的に家庭的背景による規定を被るものではなかったということができそうである。

V. 考察

以上の分析はいまだに予備的な段階にとどまる。より詳細に「媒介項」としての成績変数の位置づけを示しうるような、進路分化の実態についてのトータルな分析は、あらためて別の機会を期するつもりであるが、ここに学業成績の実態分析によって明らかになった事実に対して現段階での見解を示しておくことにしたい。

ではここまでの分析結果から、我々はどういう示唆を引き出すことができるか。それはおそらく、ここで「学業成績」の意味するものをどう捉えるかという問題と深く関わってくるはずである。考察へと進むにあたって、まずはそれを検討することから始める必要があるにちがいない。

図3 a 親職別席順スコア平均の推移 (その1)
(1911-30年入学者)

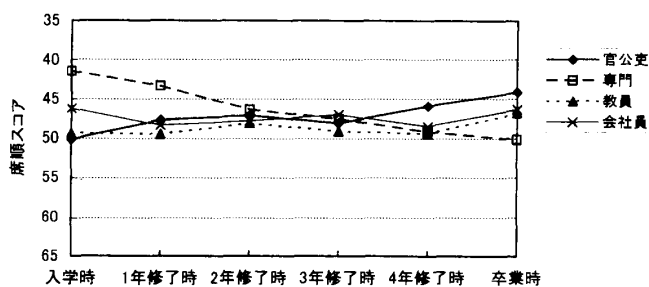
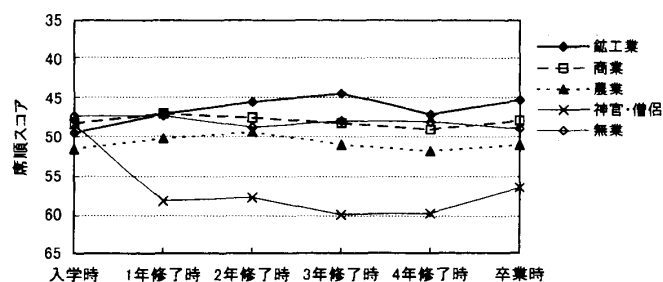


図3 b 親職別席順スコア平均の推移 (その2)
(1911-30年入学者)



そもそも、学業成績とはいったい何の指標であるのか。さしあたりそれは、学校の内部過程における成功の度合いを示す指標であるということができる。それは本稿のこれまでの叙述のなかで漠然と想定されていた概念規定でもあったわけだが、しかしそれは、たしかに結果の意味づけにおいて妥当性をもつ一方で、必ずしもその本質を言い当てるものではなかった。我々は、実はそのあたりのところを曖昧にさせたまま、ここまでの叙述を進めてきたわけである。

そこでもう少し本質にさかのぼった規定を与えるならば、何よりもそれは「学力」の指標であり、また「達成」の指標であるということになるだろう。どちらかという個人の中に蓄積された能力というニュアンスを含むが前者であり、そして「がんばった結果」という、事態のより可塑的な契機を強調した言い方が後者ということになるが、こうした捉え方は、通念的にも親しい概念規定であるにちがいない。

本稿の分析のなかで、特定の期間、入学前学歴別に明確な学業成績の傾向の違いが認められたという事実に対しては、こうした意味合いを含んだ指標性の現れとしてこの経過を理解することができそうである。すなわち、入学前の教育年数の違いによる「学力」差が、入学後まもなくの期間の成績差となって現れ、さらに、当初は出遅れていたグループもまた、在学期間を経るにしたがって他に引けをとらないくらいの「達成」度を示すようになっていった、という説明が確かに可能である。

しかし、学業成績の意味するものはそれだけではない。学校に対する「文化的な同調性」とでもいうべきものをまた、それは示しているという点についても強調しておく必要があるだろう。

教育システムの内部で行われている「評価」という営みが、必ずしも価値中立的なものではなく、しばしば階級的な偏向を内在させていることについては、学校社会学的な研究のなかで明らかにされてきたところである。すなわち、学校空間のなかで教師は、しばしば階級的な特性に依拠した参照枠に引きつけながら生徒を選別しているものであり、あるいは学校で伝えられる教育内容そのものが、支配階級に親しい高級文化への偏りをすでに含みもっていたりするのであって、既存の階級構造は、こうしたからくりを通して教育システムの内部で「能力」へと転換されていく。そうしたメカニズムの存在が指摘され、批判的に検討されてきたのであった¹⁸⁾。

本稿が分析対象としている戦前期の中学校もまた、高等教育進学のための正系のルートであると同時に、それじたい選抜・配分の装置であった。入学した当初の人員

は卒業までの間に落第や中途退学によって淘汰されていったのであり、そして、すでにみたとおり卒業に際してもまた、家庭的背景によって異なる進路配分が認められるのであった。

しかし、上にみてきたようにその内部過程においては、入学前学歴の別によって学校の授業についていけないの違いは見られても、出身家庭のタイプにもとづく学校内での成功の度合いについては一貫した傾向が認められないのだとすると、それは中学校という空間が、およそ階級的な閉鎖性への指向とは無縁であったことを示すものということができるはずである。学校内で生徒たちは、出自にかかわらず、みな同じように「がんばることができた」のである。

このような見解は、結果的に、日本の学校教育の性格規定をめぐるこれまでの通説と一致するものでもあった。日本の教育システムにおける選抜のメカニズムが、欧米のそれに比べると、家庭の文化資本からの中立性の度合いが高いという指摘もまた、しばしばなされてきたからである。そしてそのことの論拠として挙げられてきたのは、例えば論述式や面接式の試験よりも客観式の試験が一般的であるために、階級文化を基盤とした評価方法が遮断されているという、選抜場面のセッティングの問題であつたり¹⁹⁾、あるいはまた、前近代的な教養の伝統とは乖離した西洋近代的な教育内容が教えられていたというカリキュラムの問題であつたりした²⁰⁾。しかし、学校の内部選抜過程において、実際にどのような成績評価が行なわれていたのか、現実の教育評価の場面に即してそのことが検証されたことはなかったのであり、その意味で本稿の分析は、上述のような状況認識を、実態の検証によって補強するものということができるはずである。

もちろん現在の義務教育段階においても、学業成績の階層差が確かに観察されるという事実からも示されるように²¹⁾、一般的に学校での成功に対しては、家庭的な背景が何らかの効力をもつであろうことはまちがいない。しかし、ここでみるかぎり、この時期の中学校内部での選抜過程においては、その効果は決して大きなものではなかった。ここで戦前期の教育階梯のなかで、学業成績の階層差の現象が存在していたとしても、おそらくそれは小学校段階までであったとの想定が可能になってくると思われる。経済的要因による教育機会の格差や、家庭的な事情にもとづく学歴取得パターンの違いはあったにせよ、少なくとも一定の入学選抜を経た人材をあつめた中学校という組織の内部では、努力と能力とが幅を利かす世界が開かれていたということになる。

註

- 1) 齊藤利彦『競争と管理の学校史—明治後期中学校教育の展開—』東京大学出版会, 1995。
- 2) 深谷昌志『学歴主義の系譜』黎明書房, 1969, 天野郁夫『教育と選抜』第一法規, 1982, など。
- 3) 本研究を進めるにあたって, 鶴岡中等教育研究会(代表: 広田照幸)からデータの提供を受けたことを付記しておく。
- 4) したがって本稿が分析対象としている期間の途中で学校名が変更になっているわけであるが, 混乱を避けるために, 本稿中は一貫して「鶴岡中学校」と表記することにした。
- 5) データ・ベースの作成過程等の詳細については, 広田照幸・鈴木智道・高瀬雅弘「旧制中学校卒業生の進路分化過程とその規定要因に関する研究—山形県鶴岡中学校を事例として—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第39巻, 1999, を参照のこと。
- 6) 国立教育研究所編『日本近代教育百年史』第5巻, 1974, pp 171-173。
- 7) 山形県鶴岡南高等学校『山形県鶴岡南高等学校百年史』1994, pp175-178。
- 8) 深谷前掲『学歴主義の系譜』, pp143-144。あるいは天野郁夫編『学歴主義の社会史—丹波篠山にみる近代教育と生活世界—』有信堂, 1991, p86, など。
- 9) そのあたりの経過について触れた文献として, とりあえず以下のものを挙げておく。天野郁夫『試験の社会史—近代日本の試験・教育・社会—』東京大学出版会, 1983, とくに4章と8章。齊藤利彦『試験と競争の学校史』平凡社, 1995。拙稿「〈表簿の実践〉としての教育評価史試験—明治期小学校における学業成績表形式の変容をめぐって—」『教育社会学研究』第56号, 1995, pp45-64。
- 10) 齊藤前掲『試験と競争の学校史』, pp183-190。
- 11) 「試験規程(大正十三年七月改正)」『職員会決議録』(鶴岡南高校所蔵)。ただしボーダーラインの者に対しては, 救済措置の規定も用意されている。
- 12) ただし, 鶴岡工業学校については, 鶴岡町立染織学校(1895年創設)以来の前史をもつことを付記しておく。
- 13) 天野編前掲『学歴主義の社会史』。
- 14) 同上書, 第Ⅲ部。
- 15) ただし, 今回のデータベースの元になった学籍簿中の族籍欄の記載状況が, 1925年以降数年にわたって極端にまばらであるため, そのことによるバイアスを避けるため, 24年入学者までのデータによって表3を作成した。以下, 表6や図2など, 族籍変数を活用した分析に際しては, すべて同様の処理が施してある。
- 16) 深谷前掲『学歴主義の系譜』, 天野前掲『教育と選抜』, 天野編前掲『学歴主義の社会史』などのほか, とりわけ詳細な検討がなされた論考として, 園田英弘ほか『士族の歴史社会学的研究—武士の近代—』名古屋大学出版会, 1995, 第6章, を挙げておく。
- 17) 身分から職業へという「士族のエートス」の変容については, 広田ほか前掲論文中に, 本稿と同じデータにもとづく詳細な分析がなされている。そちらを参照のこと。
- 18) とりあえず代表的な論文集として次を挙げておく。M. F. D. Young ed. "Knowledge and Control", Collier-MacMillan, London, 1971. また, 森重雄「現代教育の基本構造」田子健編『人間科学としての教育学』勁草書房, 1992, 第9章, を挙げておく。
- 19) 竹内洋『パブリック・スクール—英国式受験とエリート—』講談社現代新書, 1993。
- 20) 天野編前掲『学歴主義の社会史』。
- 21) 荻谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史—』中公新書, 1995, とくに第3章。
(なお, 本稿は, 文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。)